

第7回 「日本語大賞」

テーマ「わたし私がつか使いたいことば言葉」



小学生の部 優秀賞 受賞作品

まってたよ

神奈川県

湘南ゼミナール 川崎大師教室

小学4年 砂原 心優

まっていたよ

神奈川県 湘南ゼミナール 川崎大師教室 小学四年
砂原 心優（すなはら みゆ）

「まっていたよ。暗い海みたいなので、体そつずわりして、ゆるゆるゆれてたの。」

子どもの中には、お母さんのおなかの中にいた時のことを覚えていて、とつぜんその時の気お話を話し出すことがあるそうだ。母が私に、

「おなかの中にいた時のこと覚えてる。」

と聞いた時、三才だった私はそう答えたそうだ。そんなことを言ったのかとノートを持ったまま、一番おどろいたのは私だった。

るす番をしている時に見つけた、黄色いノート。少しふやけたようにふくらんでいたのは、小さく切りぬいた写真がところどころはられていたからだだった。文字でうめつくされた、そんな母の日記を読んで、自分でも覚えていない出来事にうれしいようなはずかしいような気がした。

日記には、私が生まれた日からのことが細かく書かれていた。赤ちゃんだった私の様子だけではなく、両親や祖父母がどんなにかわいがってくれていたか、私の飲んだミルクの量や、いたずらしたことなどがたくさん書かれていた。私のことが一番かわいかったみたいで、すごくうれしくなった。私は、この世界に生まれてくることを、この家に生まれて今の家族に会えることを「待って」いたことに気づいた。

今は、弟とけんかしたり、毎日ちよつとしたことで母におこられてしまう。かたづけができていなかったり、弟が勉強のじやまをしてきた時に、

「お姉ちゃんなんだから、がまんして。」
とか

「お姉ちゃんなのに、なんでできななの。」
と言われ、私はいいわげができなくて悲しくなる。私のことなんて、どうせすきではないのだと思ってしまうことがある。

でも本当は母に話したいことがたくさんある。新しい友達ができたことや楽しかったこと、読んだ本のことを教えてあげたいし、聞いてほしい。

母が仕事から帰って来たら、今日は久しぶりに言ってみよう。

「おかえり、まっていたよ。」と。